

9月

「この杯を過ぎ去らせてください」

マタイ福音書 26章36節〜54節

マタイによる福音書で描かれるゲッセマネでのイエスの姿は私たちに非常に強いインパクトを与える。悲しさのあまりもだえ、その悲しみのゆえに、弟子に共にいて目を覚ましてるようにと願う。また三度「杯が過ぎ去るように」神に祈るのである。

そのような弱気なイエスはしかし、手にした杯を投げ捨てること

はしない。杯は神がその手に持たせたもの、手を放すという事は神との関係を自ら断ち切るという事、しかし死ぬばかりの悲しさは癒されることはない。それゆえに「祈る」のである。

H・ナウエンは著書の中で、このイエスの祈りを「この地球上のいたるところにいる子どもたちや大人たちの絶えがたい苦悩を目にする時、それを受け入れる力をどこから求めていくべきかと、戸惑います。自分の心の中にも、仲間たちの心の中にも、あの悲痛な叫びが聞こえてきます。…イエスのあの叫び…それは…激しく燃えさかる炎のような祈りなのです。」

と言う。

絶えがたい、死ぬほどの悲しみに包まれた時、そのような人と出会った時、私たちはその杯をその手に持ち続けることができるだろうか？ その杯を持ち続けるように勧めることが出来るだろうか？ イエスのように「御心のままに」と祈ることが出来るだろうか？

今いえる一つの事は、しかし私たちは祈る相手を知っており、私たちの嘆きに耳を傾けてくださる方を知っているということである（ルターは、祈りとはあらゆる苦難にさいして神によびかけることだという）。そしてもう一つ、私たちが知っていることは、そんな私やあなたと祈る兄弟姉妹と共に座っているということである。

■祈り

御子イエス・キリストの苦しみと死において、人の思いをはるかにこえて恵み深く、また救いに満ちた主なる神さま、私たちの世に、心にお入りください。

10月

敵対者への祈り

マタイ福音書 5章43節〜48節

「敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい」という言葉は、山上の説教の中でもひととき目立っている。ローマイヤーはこの祈りを、祈りの歴史上初めて要求された、祈る人を襲撃する人々のとりなしの祈りであるという。これは特殊な状況において求められる倫理の言葉なのか、それとも実行できない自らの罪深さを自覚するための言葉なのだろうか？

この祈りを自らの実践課題として受け止めるのであれば、それは確かに実行不可能な私の罪を知るための機能を果たす。しかし敵や迫害者とのように向きあうか？

そのための生きる姿勢について語られた言葉であるとすれば、ここで言われる祈りは決して実現困難な実践課題ではなくなる。

ではどのように祈るのか？

マザー・テレサは祈りについて「必ず必要なこととして「沈黙」をあげる。そして願いごとではなく、自分自身を神のみ手に置き、そのなされるままにお任せし、私たちの

心の深みに語りかけられる神のみ声を聞くことが祈りであると言う。そうであるならば、私たちは「敵を愛し、自分を迫害する者のために祈る」とき、あえて言葉は必要ない。語るのではなく聞くこともまた祈りなのである。そして沈黙のうちに耳を澄ますのみに終わったとしても、「霊」自らが、言葉に表せないうめきをもって取り成して（ロマ8・26）」くれるのである。

「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。どんなことにも感謝しなさい。これこそ、キリスト・イエスにおいて、神があなたがたに望んでおられることです。」（テサロニケ一5・16〜18）

■祈り
「主よ、お話しください。僕は聞いております」

女性会連盟 聖書研究

2014年5月〜2014年10月

「祈り」 マタイ福音書から

ルターは「キリスト者がいるところには、本当に聖霊がいて、聖霊は絶えず祈っている。たとえ彼がいつも口を動かさず言葉が発してはいなくても、心は動き鼓動している(ちょうど体の中で心臓が脈を打つように)。だから、祈らないキリスト者を見つけることは、脈のない生きている人間を見つけないと同様に不可能である。脈は、人が眠っていても、まったく気にかげず他のことをしていても、決して止まることなく常に動き、打ち続けているからである。」と語る。
キリスト者にとって切っても切り離せない「祈り」について、マタイによる福音書から思いめぐらせてみたい。

講師紹介

小泉 嗣(こずみ つぐ) 牧師



出身地 生まれは山口県の宇部市(小児洗礼)

育ちはお隣の下関市

高校入学と同時に京都市(堅信)、芦屋市、西宮市で

過ごし神学校に入学しました

按手年 2002年

歴任教會 初任地 日本福音ルーテル湯河原教会

日本福音ルーテル小田原教会

2008年より 日本福音ルーテル千葉教会

家族のこと 妻と3人の娘(7歳、5歳、2歳)の5人家族です

趣味 映画鑑賞やビリヤードですが、最近はおっぱら就寝前

の麦酒を片手に欧州サッカー鑑賞です

5月

手を置いて祈る

マタイ福音書 19章13節〜15節

イエスの手は人に救いをもたらす。祝福が祈られる。この「手」を通して実現するイエスと人々の交わりは、神とイエスの交わりに基づいて行われる。イエスは「自身を神の「手」にゆだね(ルカ23・46)、神は愛する御子の「手」にすべてをゆだねる(ヨハネ3・35)。

私たちは牧師から頭に手を置いて祈ってもらうことはあっても、誰かの頭に手を置いて祈ることはめつたにない。按手も祝福も礼拝の中で牧師に委ねられているからである。人々が子どもたちをイエスのもとに連れて来た理由もそこにある。当時ユダヤ教の指導者から手を置いて祈ってもらうという事は、神が直接「手」を置いて祝福することを意味した。

しかし手を頭に置かずとも、肩を落とす者にそつと手を置き、悲しむ者の握る手にそつと手を置き、抱き合い手を取り合つて喜びを分かち合うことがある。手が他者と触れるとき、そこには人と人との直接の交流がある。

手を置いて祈る行為そのものは祝福を意味する、そこにあるのはより具体的な神との交わりである。人々は神との交わりをイエスに求め、イエスもまた子どもたちが叱責されたのは、子どもたちと神との交わりを断とうとしたからである。手を置くとは目に見える形での交流を表す。そこに祈りが加わればそれは、神を通しての隣り人との直接的な交流であり、隣り人を通しての神との具体的な交わりである。

■祈り
私たちが祈るとき、そこには手を置いて共に祈つて下さる主イエス・キリストの祈りがある。隣り人と手をとつて祈つてみよう、隣り人の握つた祈りの手に自らの手を置いて祈つてみよう、イエスが求めた交わりを感じる事が出来るかもしれない。

■祈り
手を置いて祝福してください。私たちが一人で、そして共に祈るとき、私たちの手を取つて共に祈つてください。

6月

食前の祈り

マタイ福音書 14章13節〜21節

私たちは日に何度、どのような時に祈るだろうか？ イスラム教のように祈りの時間は決まっていなないし、カトリック教会のような祈り書もない。もしかすると礼拝や祈禱会を除くと共に祈る祈りで最も機会が多いのは食前の感謝かもしれない。

イエスもまた食事の前に祈りをささげる。給食の奇跡や最後の晩餐の際にパンや魚を手を賛美の祈りを祈る。これは食べ物を与えて下さったことについて神に感謝することを意味する。神は私たちが生きるためにパンが必要であることをご存知である。日々何を食べようか、何を飲もうかと思ひ悩む私たちに、目の前の食卓が私たちの労働や努力の結果整えられるのではなく、神が日ごとの糧として与え整えられているとイエスは示す。

■祈り
またその食卓であるが、当時のユダヤの庶民の経済事情を鑑みると晩餐とよべるような整ったものではなかったはずである。そんな貧しい食卓においてもイエスは賛美の祈りを祈る。

美の祈りを祈つたのである。たとえ僅かであっても与えられた食べ物を神に感謝するために。今日の食糧事情は、世界中の人間が生きて行くために必要な量の2倍の穀物が生産されているにもかかわらず飢餓が進んでいると言ふ。

■祈り
今から20年以上前の話であるが、女性会連盟が婦人会連盟と呼ばれていた時代に「あなたの食卓に一人の客を」という、その食卓の一人分の食費を献金するというキャンペーンがあった。今から2000年ほど前「我、一飯を捧げて人々の飢えを救わん」と説いた日本國学者がいた。

■祈り
イエスのささげる賛美の祈りは、人が生きるために必要な糧について、問うているようにも聞こえてくる。

■祈り
主なる神さま、私に、隣りに、日々の糧を与えてください。

7月

求めるものが得られる祈り

マタイ福音書 21章18節〜22節

祈りとは、悔い改めであり、賛美であり、願いである。私たちが祈る祈りのそれぞれの割合はどれくらいであろうか？ 私などは圧倒的に願いが多い。家族の健康から世界の平和、教会の成長：願いはつきることがない。そしてある願いはかなえられ、ある願いは未だかなえられていない。キリスト教は御利益宗教ではない。しかしイエスは「求めなさい」と言う。「信じて求めるならば何でもかなえられる、信仰が山をも動かす」と言う。

マタイによる福音書21章18〜22節には、イエスが、葉は茂るのに実のなっていないいちじくの木を呪つて枯らせてしまう物語が語られる。一読すると身勝手な理不尽な物語であるように思える、いちじくの木に同情すらしてしまふ。『ご主人さま、今年もこのままにしておいてください』と別のいちじくの木を守つた園丁のたとえ話を語つた人と同一人物とは思えない一連の言動である。しかし、イエスはここで「実」を求め、そ

んな姿勢が木を枯らし、信じて祈ることについて語る。「実」とは信仰である。体裁を整えることを求めているのではなく、そこに信仰があるかどうかを問題としているのである。私たちが信仰もつて祈るとき、求めるものは何でも与えられる。信仰は力である。しかし、その力は私が所有しているものでも、内から出てくるものでもなく、ただ与えられるものである。すなわち信じて祈り、何でも得られるという事は、私の願が実現するのではなく、神から与えられた信仰による願が実現することを意味するのである。

■祈り
「私の求め」「私の願い」の前に「神の求め」「神の願い」に耳を澄ませる、そのような「実」のある祈りをイエスは求めておられる。

■祈り
主よ、私たちの心を日々新たに、造りかえ、何が御心であるか、何が善であつて、あなたに喜ばれ、かつ完全なことであるかをわきまえ、知る者とならせてください。

8月

偽善者の祈り

マタイ福音書 6章5節〜8節

イエスは「このように祈つてはならない」と言う。「こう祈りなさい」といつた肯定的な模範解答ではなく、失敗例を挙げる。祈りとは人に見てもらふためにするものではないこと、くどくどと述べてはならないこと、非常に具体的である。

「人前で祈ることが苦手」だと思つている人は多い。自分の思いを上手く言葉にできないから、自分の信仰が白日の下にさらされ、評価されているような気がするから、理由はそれぞれであろう。

■祈り
牧師になつてすぐのころ、洗礼を受けて間もない方が礼拝前の祈りを担当してくださる日曜日があつた。皆が手を合わせ目を閉じると、ポケットから何かを取り出す音がして祈りがはじまつたのであるが、その祈りも「今日は何月何日、聖霊降臨後第何主日の礼拝です。今日は礼拝後何々が予定されています。みなさんよろしくお祈りします。」といった朝礼の挨拶のようなものであつた。おそらく周りの方々も驚かれたことと

思う。しかしその方の祈りは、私たちが守ろうとする礼拝がどのような礼拝で、その主目を過ごすのか？ ということを明確にくくれる、最初の備えの祈りであつた。あなたごとの父は、願う前から、あなたがたに必要なものをご存じなのだ。」まさにその通りであつた。何となく定式化してしまつたような祈りの言葉が一つもなく、あつという間に終わつても、周りの人が聞き取りにくい小さな声であつても、その祈りは祈りとして御心になつた祈りなのである。

■祈り
「人前で祈ることが苦手」な方こそ、「祈る」ことにふさわしい方ではないのだろうか。

■祈り
神さま、隠れたところから隠れたことを見てください。ことに感謝します。